

### ～昭和30年代の上尾～

昭和33年7月15日に市制施行した上尾市は、昨年市制施行60周年を迎えました。平成30年4月号から平成31年3月号までの上尾歴史散歩は、昭和30年代当時の広報誌『上尾自治だより』から、当時の出来事やその背景などを探ります。

## 団地の誕生

昨年7月15日、上尾市は市制施行60周年を迎えた。ことし2月1日現在の市の人口は22万8,485人で、市制施行時の3万7,149人から6倍以上に増えた。上尾市の人口の増加は、東京から約35キロという地理的な条件の良さに、当時の国の高度経済成長政策も加わり、田園都市から工業都市、そして現在の住宅都市へ変貌してきた歩みを示すものである。

市の人口が5万人を超えたのは、市制施行から6年以上が経過した昭和39(1964)年12月であった。しかし、昭和45(1970)年3月には10万人を超え、わずか5年ほどで人口が倍増した。



写真1 平塚団地(炭鉱離職者専用住宅)の竣工を伝える『上尾自治だより』(第105号)

市の人口が急増したのは、大規模な集合住宅である団地が誕生してからである。上尾市における最初の団地は、昭和39(1964)年3月、平塚に建設された平塚団地である。同団地は、雇用促進事業団が炭鉱離職者のために建設したもので、鉄筋コンクリート4階建てが9棟と大規模なものであった(写真1)。その後、県の住宅供給公社が、昭和40(1965)年4月に上尾第一団地(大字上)、翌昭和41(1966)年7月に富士見団地(富士見)を建設した。

さらに、昭和41(1966)年11月、原市に日本住宅公団(現・UR都市機構)による原市団地が誕生した(写真2)。同団地は、鉄筋コンクリート5階建て・1,583戸と巨大なもので、一つの町が誕生しよう的なものであった。

次いで、翌昭和42(1967)年2月、瓦葺に同じく公団の尾山台団地(鉄筋コンクリート5階建て・1,760戸)が誕生した。さらに、公団の団地は高崎線西側(小敷谷)にも誕生し、昭和43(1968)年12月に西上尾第一団地(鉄筋コンクリート5階建て・3,202戸)、昭和45(1970)年3月に西上尾第二

団地(鉄筋コンクリート5階建て・2,993戸)が続けて誕生した(写真3)。県内で一つの市町村に千戸以上の公団住宅が4カ所もあるのは、上尾市だけであった(『上尾市史』第八巻)。

公団の団地に加え、昭和42(1967)年に行われた埼玉国体の選手村も、国体終了後、県営のシラコバト団地(大字上・久保)に衣替えし、昭和40年代前半は上尾市にとって団地の建設ラッシュであった。その結果、上尾市の人口は、昭和40(1965)年から昭和45(1970)年までに102・3割の増加を示し、人口10万人以上の市では全国一の増加率となった。そして、昭和45年の市の人口の3割が団地人口で、市民の3人に1人が団地の住民という状況であった(『上尾市史』第七巻)。

なお、人口が15万人に達したのは、10万人を超えて6年後の昭和51(1976)年10月であった。しかし、20万人を超えたのは平成4(1992)年6月であり、さらに16年かかった。まさに市の人口増加のピークは、平塚団地の誕生に始まる昭和39(1964)年から昭和40年代にかけてであったといえよう。

(上尾市歴史民俗研究会)



写真3 建設中の西上尾第一団地



写真2 空から見た原市団地